

事業計画書

第Ⅶ期（令和4年8月1日～令和5年7月31日）

一般社団法人ハビリスジャパン

I 活動方針

1. 手や足に障がいのある子どもたちの成長と活動に“適した“環境を整えることで一人ひとりの可能性を広げ、成長を支え、未来を育む支援を行う。
2. 障がいがある子どもたちが、義手や義足を使うことにより、子どもたちの社会参加に向けた総合的な支援体制を築く。
3. 情報発信を行い、家族だけでなく、医療・教育機関等の関係諸団体と連携をとりながら事業を実施する。
4. 第VI期と同様にコロナ禍のイベント開催の判断を慎重に行うとともに開催する時は、参加者及びスタッフの安全を第一に考え、新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた上で実施する。
5. インターネットを活用した各種イベントの開催方法等の検討を含め、子どもたちが安全に活動に取り組めることができるための情報提供と情報交換の場をつくる支援を実施していく。

II 今年度の主な事業

1. 障がいのある子どもたちの社会参加の支援事業 [ノエビア財団 柱立て2]

障がいのある子どもたちが、より良い社会生活を送るための機会創出を目的とするイベントを継続的に開催する。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、従来のような子どもたちが会場に集う形でのイベントの積極的な開催は難しい可能性が高い。このため、感染状況に応じて Web 会議システム（ビデオ通話システム）を利用した形でのイベントを開催する。全国の当事者や専門職、支援者や協力団体が参加・連携できる体制を実現する。

会場に集う形でのイベント開催が実現できた場合は、十分な感染対策を講じた上で実施し、スポーツや様々な活動に適した機能のある義肢（アクティビティ用義肢）を使用体験する場を設ける。また、アクティビティ用義肢の利用促進を図ることを目的にアクティビティ用義肢体験会を開催する。

新型コロナウイルス感染症の状況により Web 会議システム（ビデオ通話システム）を使用

- ① 双方向通信を用いた家族会
- ② PAFF 運動教室 [大泉スワロー体育クラブ・大阪 PAFF・北海道 PAFF・沖縄 PAFF]
- ③ テコンドー教室
- ④ 各種団体との共催イベント
- ⑤ キッズスポーツスクール
- ⑥ 料理教室
- ⑦ アクティビティ用義肢体験会
- ⑧ スキー、スノーボード教室

2. リハビリテーション・ハビリテーションの教育・啓発事業

教育・啓発活動のための情報発信をインターネット、マスメディアを中心に行う。

(1) 教育・情報交換会セミナー [ノエビア財団 柱立て3]

当事者、専門職などの関係者間のつながりを強化し支え合いの仕組みを強化することを目的に、先輩当事者自身の経験に基づいた情報・知恵の共有ができるオンライン講演会、セミナー、相談会等を実施する。講演会やセミナー内容については、当日参加できなかった当事者や専門職が後日視聴できるように録画して動画コンテンツ化する。

・オンラインセミナー IVI (アイビー) Skills for Life

(2) 社員教育研修

一般企業を対象とした社員教育研修等の教育プログラムを対面またはオンラインで実施する。講演会や疑似義肢体験を通して義手、義足の啓発活動行う。

(3) 専用サイトの充実 [ノエビア財団 柱立て1 / 柱立て3]

イベントで得られた知見や専門部会委員が研究した成果などを、専用サイトを通じて広く発信することにより、教育・啓発活動を行う。家族の体験談やインタビュー記事、パラスポーツ、パラスポーツ選手の体験談を掲載し、「知る」きっかけを提供する。

専用サイトアドレス (<http://habilisjapan.com>)

(4) ソーシャルネットワーキングサービス (SNS) による情報発信 [ノエビア財団 柱立て3]

Instagram を含め Twitter、Facebook ならびに YouTube の専用アカウントからの情報発信を積極的に行う。イベントで得られた情報をタイムリーに発信することにより、専用サイトへ誘引し啓発活動を促進するとともに、会員増加 (新規会員獲得および現会員の継続率増加) を目指す。

(5) マスメディアを通じた情報発信

イベント開催や研究で新たな知見を得られた際はマスメディアに対してニュースリリースを行い、取材対応をすることによって、本法人の目的を広く情報発信する。

(6) 絵本を通じた啓発活動

絵本「いろんなおてとぼく」を連携施設、団体及び当法人の会員の子どもたちが通う幼稚園や小学校に配布し、対象児及び家族が義肢や当法人について知る機会を提供する。販売を開始し、全国にいる当事者家族や専門職などの関係者が絵本を入手しやすい環境を整える。

(7) PAFF ライブラリー

昨年度、手足に特徴のあるこどもとご家族のための会員制のコミュニティサイトを構築した。動画や画像の投稿や閲覧、参加者同士でコメントのやりとりが可能であり、悩みの共有や同じ特徴のある友達の挑戦方法を知ることができる。第Ⅶ期も活用を継続し、当事者 (児童とその家族) が日常的か

つ継続的に情報共有ができる場を提供していく。また、専門職が義肢の研究開発やハビリテーション、指導法開発等に活用可能なライブラリを目指す。更なる参加者の増加とコミュニティの活性化を目指す。

3. 小児用アクティビティ・日常生活用義肢等の開発・調査研究事業

(身体運動能力向上のための調査)

四肢形成不全児の健全な発達が促されるよう身体運動能力向上につながるプログラムの研究・開発・提供を目標とし、運動イベントでの体力測定を中心に子どもたちの身体運動能力のデータ収集及び、運動習慣や運動支援に関するアンケート調査を行う。また、得られた情報から日本製の小児用アクティビティ・日常生活用義肢等の開発につなげる。

(運動用義肢の開発)

日本製の小児用アクティビティ・日常生活用義肢の開発を企業・各種団体と協力し進める。一般財団法人トヨタ・モビリティ基金と協働して、新たに縄跳び用等、子どもたちからの要望の高い義手・義足用部品の開発に取り組み、将来的には部品の協力企業からの販売と本法人によるレンタル、義肢の製作・適合調整技術の提供を目指す。

4. 小児用アクティビティ・日常生活用義肢等のレンタル事業

障害のある子どもたちを対象とした様々なスポーツ活動、具体的には跳び箱、マット、鉄棒等の運動を行うに当たり必要な義肢用部品及び運動用具の整備を行う。イベントでは、運動用義手、義足を試用できる模擬義手を活用し、イベントで子どもたちが運動用部品を体験できる体制を整える。今年度も Shroom Tumbler、TamTam、Hamo のマット運動用および鉄棒運動用手先具、筋電義手の貸与を継続する。

5. その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

(1) 会員、寄附者、提携サポーターの募集活動

本法人の目的を広く認知してもらうため、個人会員、賛助会員、寄附者の新規獲得を行うと共に現会員の維持に努め、長期的な運営資金を確保する。

個人・賛助共に、新規会員や新規寄附者の獲得を目指した活動が続けるが (SNS・メディアによる情報発信や紹介者経路の強化等)、昨年度に引き続き、手薄だった既存会員・寄附者との関係性構築に注力することで、継続率アップや会費・寄附額増等による収入安定化を目指す。

なお、賛助会員に対しては、企業を対象として新規作成する広報資料を活用しながら、まずは協業・連携による関係性づくりに注力する。

個人会員 105 万円 賛助会員 65 万円、寄付額 80 万円として、合計を 250 万円/年を目指す。

(2) 各法人・団体・個人との連携・協力体制の構築と継続的な情報交換

全国の医療機関、義肢装具製作会社、義肢部品製造・販売会社、自治体、マスメディアならびに障害者スポーツ協会などの各種団体との連携を行う。またイベントを合同で開催する法人及び団体を

開拓しパートナーシップの構築を目指す。

貸与する小児用筋電義手の訓練の連携医療機関や運動用義足の運動支援の連携団体を増やし、将来的には日本全国で義手義足を用いたアクティビティの活性化につながる体制づくりを目指す。

(3) 公益財団法人ノエビアグリーン財団 (令和4年5月～令和5年4月)

令和4年5月～令和5年4月までの期間を対象に「本邦の障害がある子供たちが、パラスポーツを通じて新たなことに挑戦し自分の可能性を広げることを目指しパラスポーツ体験授業」として1,250,000円の交付を得た。下記の3つの柱で事業を遂行する。

柱立て1：当法人のHPでパラスポーツを「知る」きっかけを提供する。対応事業2-(3)

柱立て2：体験会で子ども達が安全に「挑戦する」ことができるように物、体験できる場所を含めた環境を整える。対応事業1

柱立て3：体験会やイベントで仲間や先輩と「繋がる」場を提供する。特に、障害のある子ども達が全国に散在することから、地方在住でも様々な悩みを共有したり、障害のある子どもたちの挑戦インタビューなどを掲載し、オンラインコンテンツの充実を図る。対応事業2-(1) (3) (4)

(4) 事務局体制の整備と今後の運営

現在、事業の拡大に伴い、イベント告知、会員へのお知らせや各種発送作業、各所への対応や準備・打ち合わせなどの業務が増え始めている。これまでの体制ではこれらへの対応が難しく、事務局体制の早急な整備が課題である。業務内容によっては、効率化を図るため業務マニュアルの作成やシステム化を進め、本業を持ちボランティアで関わっていただいているプロボノメンバーを含め、関わる人を増やし事業の拡大に備えるとともに、全てのメンバーが無理なく持続的に活動できる基盤を整備していく。